

【東京】国内最古の公立精神科病院に新院長「傾聴を大切に」-布村明彦・東京都立松沢病院院長に聞く◆Vol.1

慈恵医大教授から東京都立病院機構の公募を経て第20代院長に就任

2025年8月20日（水）配信 m3.com地域版

2025年4月、東京都立松沢病院（世田谷区）の新院長に、東京慈恵会医科大学で教授を務めた精神科医の布村明彦氏が就任した。同院は日本で最も歴史のある公立精神科病院であり、「日本の精神医学の父」と言われる呉秀三氏など歴代院長には大家が名を連ねる。「大変な重圧」と就任時の率直な感想を話しつつも、「これまでと同様、傾聴の姿勢を大切にしたい」と自身の持ち味を生かしていく考えだ。第20代院長に、医師としての半生を聞いた。（2025年6月23日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)



布村明彦氏（本人提供）

旭川医大に22年、山梨大に10年、慈恵医大に6年半

——布村先生は1986年に旭川医科大学医学部を卒業しました。まずは、医師を目指し、精神科を専門にした理由をお聞かせください。

特別な体験はあまりないのですが、強いて言えば4つ上の兄が医学部に進んだことは影響しているかもしれません。兄は勉強だけでなくスポーツもでき、生徒会長も務めるといった、いわゆる健康優良児でした。一方の私は体が細くてどちらかというと病弱、性格はやや内向的で、読書を好む子どもでした。

そんなタイプだったので、大学入学時には自然と精神科を意識していました。「医者になってもじっくり考える、思考を重ねていく仕事が自分に合うのではないか」と感じていたのです。とはいえ、4年から始まったポリクリ（臨床実習）で各科を回っていくとそれぞれに魅力を感じました。「オペ室の緊張感は刺激的だな」「小児科もいいな」などと思うようになり、勧誘会や飲み会にもいろいろと行きました。その上で、最終的には「自分の能力を最も発揮できる分野だろう」と、卒業後に同大の精神医学講座に入局しました。

——その後、先生は同大で助教授を務め、山梨大学医学部で准教授、東京慈恵会医科大学で教授を務めます。中でも印象的だった時期はいつですか。

旭川医大に22年、山梨大に10年、慈恵医大に6年半いました。中でも印象に残っているのは旭川時代です。私が若く、また勤務期間が最も長かったこともあると思いますが、同僚に恵まれ、のびのびと仕事をさせてもらったことは思い出されますね。当時は講座の同期が6人おり、その前の期の先輩も同じくらいの人数がいて、地方医大では医師数が充実していました。医局単位の行事がまだ多い頃で、勉強会があった日は必ず飲みに行き、小旅行なども行いました。まさに「切磋琢磨」といいますか、よく学び、よく遊ぶ環境でした。

山梨大と慈恵医大でも仲間に支えられました。医局を移るのは大変なことです。新しい土地に行き、新しい人間関係をつくるのは相応にエネルギーが要りますが、周囲への感謝を常に持つ大切さなど、学んだことは多くあります。山梨大では、神経内科の先生方と一緒に立ち上げた「山梨認知症を考える会」の活動が忘れられません。家族会代表のほか、県医師会理事や県長寿社会課長にも加わっていただき、認知症診療の地域ネットワークづくりに貢献しました。

一方の慈恵医大ではまず本院に在籍し、後半の4年間は狛江市にある第三病院の精神神経科で教授・診療部長を務め、認知症疾患医療センター長を兼任しました。第三病院の特徴として、同大精神神経科の初代教授である森田正馬先生が1919年に創始した精神療法「森田療法」を提供し続けています。日本発祥の治療法を勉強させていただく機会を得られたことも、精神科医として血肉になったように思います。

■ 三つの医局を渡り米国留学も「常に人に恵まれた」

——資料によると、先生は旭川医大に勤務していた1997年から2年間、アメリカに留学し、そこで「とても貴重な経験をした」とあります。

学位論文の研究テーマから、私は酸化ストレスに注目して脳の老化を研究してきました。その中で、米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学病理学研究所のジョージ・ペリー研究室が酸化ストレスに関する優れた論文を発表していたことを知り、手紙を送って熱意を伝えたところ、教授の了承を得られて留学することが決まったのです。

旭川医大では動物実験を重ねていましたが、同研究所ではアルツハイマー病の剖検脳そのものを使って酸化ストレスマーカーの研究を行っていました。当時の日本、特に地方医大でヒューマンの質の良い脳組織サンプルを研究するのはとても難しかったので、これは研究を推し進める上で大きかったです。やがて、私が書いた論文は方々で引用されるようになり、日本認知症学会や日本老年精神医学会などに評価していただけるようになりました。現在は両学会の理事を務めています。

忘れられないのは、この時も素晴らしい出会いがあったことです。たまたま同じ時期に東北大学医学部神経内科の先生と武田薬品のフェローの2人が研究室に在籍していました。彼らがとても優秀で、良いアドバイスをくれたおかげで研究を進められました。振り返ると、私は常に人に恵まれてきたと思います。不思議と、人生の節目節目に素敵な出会いがありました。

■ 「松沢」の院長職「やりがい120%あるだろう」

——そのような曲折を経て、2025年4月に東京都立松沢病院の第20代院長に就任します。どんな経緯だったのでしょうか。

前任の水野雅文先生がご退任の意向を示され、当院の母体である東京都立病院機構が院長を公募していました。懇意にしている先生がそれを教えてくれ、私に応募を勧めてくださいました。精神科医の中で、「松沢」の名を知らない人はいません。公立の精神科病院では最古の歴史があり、第5代院長の呉秀三先生など、日本の精神科医療の発展に貢献してきた人たちが名を連ねています。呉先生はドイツやオーストリアに留学してクレペリンの学問体系やピネルの人道的治療を導入するなど、「日本の精神医学の父」と呼ばれる大家です。

「やりがい120%あるだろう。だけど、自分に務まるのか……」。逡巡しましたが、自分を信頼してお声がけいただいた先生の期待にも応えたいと、慈恵医大の主任教授に相談して許可をいただき、手を挙げました。

——歴史ある病院の院長になることが決まった時の率直な感想を教えてください。

重圧の方が大きかったですね。今も感じ続けていますが、これはもう開き直りと言いますか、今から生まれ変わるわけではないので、「これまでの経験を生かして、自分にやれることを積み重ねていこう」と考えました。まずは健康を害さずに元気で勤め続けること、そして、今までのように周りのご意見によく耳を傾けること。そうすれば、おのずと道は見えてくるだろうと思います。

◆布村 明彦（ぬのむら・あきひこ）氏

1986年旭川医科大学医学部卒。1991年同大学院修了。米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学への留学を経て、2004年同学部精神医学講座助教授。2008年山梨大学医学部精神神経医学講座准教授。2018年東京慈恵会医科大学精神医学講座准教授、2019年同講座教授。2025年4月から東京都立松沢病院院長。日本老年精神医学会理事、日本認知症学会理事など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

